



ニューノーマル時代の
診療スタイル

歯科 オンライン 診療の現在

オンライン診療の仕組みと歯科医療現場での実践例

監修 長縄 拓哉／落合 孝文／加藤 浩晃

著 尾崎 亘弘／尾崎 はる香／岸本 直隆／木村 文彦／竹山 旭／辻 要／馬場 聰／林 宏和／
前田 祐二郎／松田 謙一／丸尾 勝一郎／山本 達也／吉村 聰美

日本におけるオンライン診療の普及と推進に寄与する《歯科医師・弁護士・医師》が監修

歯科業界のトップランナー

制度づくりに関わる弁護士

デジタルヘルスを牽引する医師

長縄拓哉×落合孝文×加藤浩晃

オンライン診療は歯科医療の可能性を大きく広げます！

今日から実践できる歯科領域におけるオンライン診療のバリエーションを徹底紹介！



はじめに

本書は、2020年4月24日に齊藤 朋愛先生（福井県開業）を発起人として行われた「Tele-dentistry special online session 一いま歯科オンライン診療にできることー」（主催：一般社団法人日本遠隔医療学会・歯科遠隔医療分科会）および5月8日から4回にわたり行われた「Tele-dentistry regular meeting」（後援：株式会社 NOVENINE）をきっかけに企画されました。

本書では、遠隔医療やオンライン診療を取り巻く制度や仕組みから、それぞれの診療科、たとえば口腔外科、義歯治療、矯正、歯科麻酔などで実際に行われている遠隔医療（オンライン診療）の考え方や具体的な方法について順番に紹介しています。これまで歯科オンライン診療についてまとめられた雑誌やウェブ記事はあれど、書籍として、さらに各診療科の事例をこれほどまでに網羅し始めたものは本邦初です。これからオンライン診療を行う先生方や、オンライン診療のさらなる可能性を知り実践したいと考えている先生方にとってのバイブルとなり得ます。

とはいっても、たとえ歯科オンライン診療が普及したとしても、これまでの外来、入院、在宅へ訪問して行う診療スタイルがなくなるとは思いません。オンライン診療に限らず、AI やロボティクスを応用した診療、セルフメディケーション、デジタル医療機器を用いた自宅での検診などが、これまでの診療スタイルに加わるだけです。つまり私たち歯科医師は、これまでの外来診療を基盤に、新しい医療の提供方法を選択して、患者の状態や生活環境に合わせて選択するだけです。

このような、たくさんの治療および診療スタイルから選択して医療を提供する未来が来ることは誰にでも予想できたことですが、「その変化のスピードが予想以上に早かった」というのが 2020 年の COVID-19 がもたらした現実だと思います。

変化する世界に適応しながらも、医療の本質を忘れず、ぜひ本書に掲載された事例や先生方の取り組みを参考に、正しく適切にオンライン診療を行っていただければ幸いです。

監修者代表 長縄 拓哉

Contents

もくじ

はじめに 2

Part 1 歯科オンライン診療の現在 5

▶長縄 拓哉／竹山 旭

Chapter 1 オンライン診療の歴史 6

▶長縄 拓哉

Chapter 2 オンライン診療の3つの枠組み 10

▶長縄 拓哉

Chapter 3 歯科領域におけるオンライン診療の実際 14

▶長縄 拓哉

Chapter 4 歯科領域におけるオンライン受診勧奨と遠隔健康医療相談 18

▶竹山 旭

Chapter 5 歯科オンライン診療の課題 32

▶長縄 拓哉

**Part 2 ニューノーマル時代の
歯科オンライン診療実践例** 35

実践例1 「新しい生活」下におけるオンライン診療の積極的な応用 36

▶木村 文彦

実践例2 可撤式矯正装置フォローアップへの活用 44

▶尾崎 はる香

**実践例3 引越しした患者に対する
矯正のⅠ期治療フォローアップへの応用** 54

▶山本 達也

実践例4 インプラント治療におけるオンライン相談&診療の活用 60

▶尾崎 亘弘

実践例5 義歯臨床におけるオンライン診療	68
▶松田 謙一	
実践例6 摂食嚥下リハビリテーションにおける オンライン診療の活用	76
▶林 宏和	
実践例7 歯科麻酔科医による遠隔モニタリングへの応用	86
▶岸本 直隆	
実践例8 口腔外科領域におけるオンライン相談の活用	94
▶辻 要	
実践例9 オンラインによる口腔に関する育児支援	102
▶吉村 聰美	
実践例10 オンラインによる企業歯科健康支援	118
▶馬場 聰	
Part 3 デジタルデンティストリーの普及がもたらす オンライン診療の新しい可能性	127
▶丸尾 勝一郎	
Part 4 オンライン診療を支えるデンタルテック	137
▶前田 祐二郎	
著者一覧	147

2021年1月現在、オンライン診療に関しては制度的にもきわめて流動的であるため、実施に際しては一次情報の確認を推奨いたします。

オンライン診療の歴史

解説 長縄 拓哉（日本遠隔医療学会 歯科遠隔医療分科会）

1 日本におけるオンライン診療の歴史

日本における遠隔診療（オンライン診療）の歴史は、平成9年（1997年）から始まります。従来より、遠隔診療は医師法第20条（無診察診療の禁止）に抵触するかどうか議論がされていました。たとえば、医師が実際に対面で患者を診ずに、ビデオ通話などの情報通信機器を用いて診察を行うとして、「たしてそれは正確に所見が取れて診断がちゃんとできるのか」といった議論です。その後、平成9年（1997年）、厚生省（当時）から遠隔診療（情報通信機器を用いた診療）に関する通知が出されました。この通知では「遠隔診療は、あくまで直接の対面診療の補完であるが、直接の対面診療に代替し得る程度の患者の心身の状況に関する有用な情報が得られる場合、遠隔診療は直ちに医師法第20条に抵触しない」とされ、無診察診療の違反とならないことが定められました。しかし、遠隔で医療行為を行うことが可能になったとはいえ、当時は離島や僻地での遠隔診療が想定されていたり、在宅糖尿病患者など限られた疾患しか診られないというしがらみが強くありました。

その後、平成27年（2015年）8月に出された事務連絡で「平成9年通知の疾患（患者）はあくまで例示」と明確化されました。つまり、遠隔での医療行為は広く可能となり、平成27年は「実質的な解禁」と業界が沸いた年となりました。

そして平成30年（2018年）3月に出された『オンライン診療の適切な実施に関する指針』にて、呼称が遠隔診療からオンライン診療へと変わり、同時に「オンライン受診勧奨」、「遠隔健康医療相談」なども定義されました。令和2年（2020年）現在、保険診療であっても自由診療であってもこの指針に沿ってオンライン診療を進めていくことになります。

平成9年（1997年） 厚生省による通知

- ・遠隔診療は医師法第20条に抵触しない

【医師法 第20条】

医師は、自ら診察しないで治療をし、若しくは診断書若しくは処方せんを交付し、自ら出産に立ち会わないので出生証明書若しくは死産証書を交付し、又は自ら検査をしないで検査書を交付してはならない。但し、診療中の患者が受診後二十四時間以内に死亡した場合に交付する死亡診断書については、この限りでない。

平成27年（2015年）8月 厚労省による事務連絡

- ・遠隔での医療行為は都市部での慢性疾患であっても可能

平成30年（2018年）3月 オンライン診療の適切な実施に関する指針の見直しに関する検討会

- ・呼称の変更（遠隔診療→オンライン診療）
- ・「オンライン受診勧奨」、「遠隔健康医療相談」の定義

図 1-1 日本におけるオンライン診療の歴史。

2 歯科医療におけるオンライン診療の歴史

平成9年（1997年）に厚生省（当時）から出された通知から始まったオンライン診療（当時の遠隔診療）ですが、平成27年（2015年）の事務連絡まで、歯科は医科と同様に扱われていました。つまり、歯科も遠隔診療を行うことが想定されていました。しかし、現在のオンライン診療のガイドラインである平成30年（2018年）に出された『オンライン診療の適切な実施に関する指針』では歯科についての記載はなく、一転して歯科における

実践例 ①

「新しい生活」下におけるオンライン診療の積極的な応用



解説 木村 文彦 (医療法人社団Zion理事長／Team Endo-perio)

横須賀市にて2つの歯科医院を運営。2019年『この歯の保存をあきらめないエンドベリオ病はこう治す!』をインターネットにより出版。日本歯周病学会、日本臨床歯周病学会、日本歯内療法学会所属。

【著者連絡先】

〒 238-0007 神奈川県横須賀市若松町 2-30 モアーズシティ 5F ワンラブデンタルクリニック
<https://onelovedental.com> Email : onelovedental1580@gmail.com

〒 238-0008 神奈川県横須賀市大滝町 2-6 リドレ 3F オールスマイルデンタルクリニック
<https://all-smile.com> Email : allsmile2118@gmail.com

はじめに

筆者の歯科医院では、新型コロナウイルス禍で混乱した2020年春から、主に新型コロナウイルスへの感染に不安を感じ来院に躊躇している患者を対称としたD to Pと、歯科医師を対象としたオンラインによる症例相談(D to D)を実践してきました。

いわゆる「新しい日常」により、オンライン診療・相談のニーズは日に日に高まっていると感じています。ここでは、実際に筆者の歯科医院で行った例をいくつか紹介いたします。

① D to P 実践例

1) 患者にとって歯科医院は敷居が高い

歯科治療は、医科と異なり「薬だけ出して終わり」ということはほとんどありません。「何か手を加えて取り除く」という外科的な処置が多く、施術に入る前に十分なインフォームドコンセントを行うことが求められます。また患者側も、「歯医者となると怖くて一步踏み出せない」などの不安な気持ちを抱いている場合も多く見受けられます。

- どんな先生なんだろう
- 私と合うのだろうか
- 痛くないのだろうか

など、クリニックの門戸をくぐる前に患者が感じている不安は、普段これらが忘れているようで意外と多いものなのです。もしかしたら、「実際に来院する前にオンラインで歯科医師と話ができる安心する」という患者も多いかもしれません。

そしてこの新型コロナウイルス禍です。歯科医療従事者は、エアロゾル生成、患者の中咽頭部との接近、鋭利な器具を使うなどを理由に院内感染を起こす可能性が高い職業とされ、メディアに大きく取り上げられました。しかしオンラインであれば、物理的な接触はなく、こういったリスクをゼロにできるものと考えられます。

つまりオンライン診療とは、患者にとっての歯科医院に対する「敷居」を低くする効果が期待できると考えています。

実践例 9

オンラインによる 口腔に関する育児支援



解説 吉村 聰美（医療法人星樹会 はち歯科医院 歯科衛生士）

歯科衛生士免許取得以来、一般診療を中心に携わってきたが、勤務先で『機能矯正』に出会い、『ヒトの成長発達』を学び始める。現在は助産師と連携を取り、より低年齢の口腔育成と離乳食支援を実践。『ヒトを見る・生活を見る』歯科衛生士を目指す。

【著者連絡先】

〒 816-0905 福岡県大野城市川久保 1-12-10
<https://hachishika.com/>



図 9-1 母親たちの自粛期間中に起きた負のスパイラル。

はじめに

COVID-19 感染予防に向けた緊急事態宣言や種々の自粛により、育児支援を担うさまざまなサービスがすべてストップしたことをご存知でしょうか。2020 年の春は、幼児とその保護者を取り巻く生活環境がそれまでと大きく変わりました。生活が変わると、口腔にも変化が見られることがあります。事実、自粛などにより母親が抱える悩みやストレスは大きくなり、幼児の口腔内にも影響が生じる懸念がありました（図 9-1）。そこで筆者の歯科医院では、コロナ禍以前から行っている育児支援をオンライン上にて提供することで、育児支援の幅を広げることを試みました。自治体による『赤ちゃん訪問』や公共施設が閉鎖されているなか、助産師の石橋美幸さんの協力や「乳幼児の環境を救いたい」という方々の支援もあって、多くの方が筆者らの支援を受け入れてくれました。ここでは、オンラインによる育児支援の進めかたや、実際に工夫したことなどをご紹介します。